

令和6年度 愛媛県献血推進画策定検討委員会 議事録[概要]

- 1 会議の名称 令和6年度愛媛県献血推進計画策定検討委員会
- 2 開催日時 令和7年2月21日（金）10：00～12：00
- 3 開催場所 いよてつ会館 5階 会議室
- 4 出席者
 委 員（13名）：上田委員、羽藤委員、佐々木委員、唐木委員、三好委員、庄野委員、
 西尾委員、山崎委員、玉井委員、和田委員、空岡委員、白鳥委員、
 河野委員（会長）
 事務局（6名）：薬務衛生課長、主幹、薬事係
 保健所担当者（6名）
 県赤十字血液センター担当者（5名）
- 5 議 事
 - (1) 令和6年度献血事業報告について
 - (2) 令和7年度愛媛県献血推進計画について
 - (3) その他
- 6 議事内容（全部公開）
 - (1) 令和6年度献血事業報告について
 事務局及び血液センターから、令和6年12月末現在の献血者数、血液対策事業の実施状況等を説明
 - (2) 令和7年度愛媛県献血推進計画について
 事務局から、令和7年度愛媛県献血推進計画（案）を説明後、審議を経て了承

【発言要旨】

【令和6年度事業報告について】

発言者	内容
河野委員 （会長）	事務局及び血液センターからの令和6年度の事業報告について、質問あるいは意見等ありませんでしょうか。
三好委員	献血の予約について話があったが、予約されていない方はどうなるのでしょうか。
血液センター	現時点では、予約されている方を優先的に献血バスに案内させていただいていますが、予約が全て埋まっている状況ではございませんので、予約されていない方についても受け付けを実施しております。しかし、待ち時間等を少しでも短縮できればというところもあり、予約をお勧めしております。
三好委員	認識不足で申し訳ありませんが、各事業所に来ていただくと思うのですが、病院や役場、JAなどでも、その団体で予約を実施しているのでしょうか。
血液センター	事業所においても、事前に予約していただけると、何人協力できるのかが私どもにも早く分かるので、利点もございますので、事業所においても、予約を進めているところでございます。
河野委員 （会長）	追加で教えていただきたいのですが、移動採血車の予約率というのは、実際に献血を受けた人のうち予約した人の割合という数字でよろしいでしょうか。
血液センター	はい。その数字を表記させていただいております。

河野委員 (会長)	予約は個人が血液センターにするのですか。
血液センター	はい、個人でアプリを使って予約をお願いしているところでございます。
河野委員 (会長)	わかりました。では、移動献血車の配車先が分かっているならば、「そこに行きます」というような予約になるのでしょうか。
血液センター	ホームページに、移動採血車がお伺いする事業所や土日に配車いたします街頭献血についても掲載しておりますので、それを見て、献血される方が各自でアプリを使って予約をしていただくというシステムでございます。
河野委員 (会長)	分かりました。 予約をすると優先されるとのことですが、ある程度の時間帯が指定できるということですか。
血液センター	アプリ予約の時に、30 分刻みで予約ができるようになっておりまして、例えば 10 時 30 分に予約をいただいた場合、10 時半前に来ていただくと、優先的にバスへのご案内ができるというシステムでございます。
河野委員 (会長)	分かりました。ありがとうございました。他にご質問ございませんでしょうか。
三好委員	予約に関してですが、予約される方が多いのでしょうか。
血液センター	今現在、街頭献血においては 40%ぐらいで推移しているところでございます。 事業所においては、まだ 10%から 20%台で推移しているところでございます。

【令和 7 年度事業計画及びその他献血推進に関する内容について】

発言者	内容
河野委員 (会長)	事務局からの来年度の事業計画について、数値目標の設定と事業内容の変更点・追加点を中心に説明がありましたが、計画についてのご意見、ご質問があればお聞かせいただきたいと思います。
玉井委員	県の推進計画そのものに対しての質問ではないのですが、25 ページの本県に割り当てられた原料血漿確保目標量が昨年度と比較して増えているとの説明でしたが、こちらが 29 ページの上に記載されている国の計画に準拠して追加された内容と関連してくるということになりますか。
事務局	はい。免疫グロブリンが適用される疾患が拡大しており、供給量も増えているところから国としても成分献血を増やすなどして、原料血漿確保量を増やしていこうとしているところです。これまで県の計画には記載しておりませんでしたでしたが、本県でも免疫グロブリンの供給量が増えていることもあることから、追記させていただいて、成分献血といったものについても県民の皆様にご知っていただくことで、さらなる献血の方にご協力いただけたらと思っております。
河野委員 (会長)	ありがとうございました。他にご質問あればお願いします。
白鳥委員	若年層の献血が課題とのことでしたけれど、目標値を見ると、献血率の目標が下がっているのですが、これは何か理由があるのでしょうか。
事務局	先ほども説明しましたとおり、国の中期計画目標の「献血推進 2025」に書かれている数値を、従来から県の目標としており、今年度の目標値は来年度までに最終の目標値を達成するということで、単純に現状値との差を残りの年数で割ったものを、達成は難しい思いながらも無理やり計画値にしていました。今回、「献血推進 2025」の対象期間が令和 10 年度（2028 年度末）まで延びたということで、県の目標も合わせて、これまで同様に現状値との差で割る年数を増やしたことで、下がっている。昨年度までは 1 年で 1%近く献血率を上げるような結構、厳しいと感じる目標値の設定であったが、国の計画と同じ 2028 年に設定したことで、目標値は下がったものの、現実的に達

	成ができそうな数値としてこちらの数値に設定しております。
河野委員 (会長)	要するに目標値が高すぎて、これまでは達成できなかったけれど、別の目標値が設定されたので、延期された期間に合わせて傾斜を下げ、現実的に達成していけるものに変更したというようなことです。
白鳥委員	この目標値も高い数値を掲げても構わないと思いますし、我々に宿題をいただければ、例えば、具体的に人数を出していただいて、それをパーセンテージに反映していただけるのであれば、その達成のために、県教委としても、高校生等に働きかけをするなど、積み上げて参ります。そのような方法でも構わないので、次回の策定時にはご検討いただきたいと思います。
～唐木委員からの事業報告及び来年度事業計画発表～	
河野委員 (会長)	唐木さんのご発表も含めて、来年度計画等について、何かご質問・ご意見等ございましたでしょうか。
羽藤委員	唐木さんの発表は大変感動しました。熱意も伝わってきて、すごくよかったと思います。我々もぜひ、この学生の運動に日本赤十字社、血液センターとしても協力していきたいと思っております。 1点、アンケート調査について質問があるのですが、計画は未定とのことですが、アンケート調査を来年度の4月にも予定しているという話がありました。献血をしたことがない人へのアンケートはできるものでしょうか。 我々は、献血をする方、例えば大街道献血ルームにこられた方へアンケート調査をするということは簡単にでき、献血にこられた方の理由等を全部聞けるのですが、献血に来ない方へ「どうしてこないのか」とか、来られない背景の調査は献血ルームには絶対できないものになります。 そこで、学生の方で「なぜ献血に来ないのか」といったところの理由を探るようなアンケートをとっていただき、その結果が分かれば、僕たちが献血推進のためにどうアプローチしたらいいのかという参考になると思うので、献血バスの横を通り過ぎてる学生に可能であればアンケートができないものかと思ったのですが、現実的にはどうでしょうか。
唐木委員	献血したことがない人たちへのアンケートとなると学校側にもかけあわないといけないのですが、そちらの方もできるように、教授等とも話し合って授業の中で取り入れることができないかなども含めて検討し、事業を拡大できるように考えてみます。
羽藤委員	前向きに考えていただけると有難いです。その結果が分かれば、血液センターとしても非常に貴重なものとなるので是非、参考とさせていただきたいと思っています。
河野委員 (会長)	ありがとうございました。学生さんと呼び止めてのアンケートはなかなか難しいと思いますが、講義の時間を活用いただく等のアイディアがあるように見受けられましたが、関連して、庄野委員にお伺いしますが、大学としての支援等はございますでしょうか。
庄野委員	実はうちの大学で、献血に関する実態調査を今、実施しているところです。研究のテーマとしては、知識と行動と関心についての調査をしています。 まだ、4年生の一部しか実施できておらず、次の4月のガイダンスのときに全学部、全学年で取る予定にしていますが、先ほど話があった「献血しなかった」もしくは「できなかった」理由に関しては貧血がとても多いです。貧血・体重不足・服薬・健康上の管理が問題となっている学生が多いと思います。 また、献血をしている学生は、56人中30%ぐらいで、その中で献血を継続したいと言っているのは70%ぐらいです。残りの「献血を継続したくない」「できない」と回答している学生は、やはり貧血が理由となっています。大学生は割とダイエット等で

	体調面が整わない人が多いということと、男女差もあると思うので、やはり体調を整えて、献血ができる身体づくりをすることが、大事なのではないかという印象です。
河野委員 (会長)	ありがとうございます。啓発とは直接関係ありませんが、健康づくりを担当している立場からすると、若い女性の「痩せ」が今、1つの課題となっておりきちんと栄養を取ってもらい運動をするということができないと、献血もできないのだから大切なことだと話を聞いて思いました。 せっかくの機会ですので、委員の皆様に献血に関するご意見やご感想をいただきたいと思います。まず、医療現場の立場から上田委員さんお願いします。
上田委員	今日色々なご意見をお伺いし、皆さんが非常に献血に対して前向きに頑張っておられるという実態がわかりました。私は実際に使う立場であり、より一層大事に使う、「廃棄を無くす」「適正な使用をする」ということを現場では心して、日々診療に当たっていきたくと改めて思いました。 献血者の確保に関しては、以前は血液センターの見学の後に日赤病院に来ていただき、実際の輸血現場を見てもらうことで、一緒に参加されていた親御さんが積極的に献血していただくこともありましたが、昨今、面会も制限されている中、病院へ来ていただくことは実現が難しいところではありますが、血液センターの見学の際に協力できるようなことがありましたら、お声掛けいただけたらと思います。
河野委員 (会長)	ありがとうございました。羽藤委員、追加でご意見等ございましたらお願いします。
羽藤委員	私は実際に献血事業を行っている側のため、今日は皆様からご意見をいただき、本当に参考になりました。 最初、話があった予約についても、あまり知られてないなと実感しました。 予約は、実は完全予約してるわけではなく、話もありましたように飛び込みもあるし、勧誘時に来られる方、献血バスを見て、たまたま献血しようという人も多くいますので目標は50%にしております。半分を予約にして半分は自由に勧誘等で来てもらうということで、完全に予約枠が埋まっても50%といった感覚になります。 両方を考えた形で実施しております。ただし、献血ルームは、ほとんどが予約になってます。80～90%が予約になっておりますので、献血ルームでは予約が欠かせない状況となっており、献血バスと少し違う現状となっているということを補足させていただきます。 それから1つは、若年者対策について、我々が実際に高校に行った場合の大きな障壁となっているのが、献血の同意書です。保護者からの同意書がないと、献血ができない。この対応は高校によって違い、不要な高校もあります。不要な高校はいいのですが、必要なところは、本人は献血しようと思っても同意書が出ないということで、ストップがかかってしまう状況です。ですので、この点を是非、教育委員会の方で少し意見を吸い上げて、どのような形で運用するのが一番いいのか検討いただきたい。我々としては、保護者の同意書を前もって提出していただくシステムでは、当日、本人がしたくてもできないという状況になるため献血者が増えないのが現状です。 当日、いくら献血セミナーをしても、そこが難しいため献血者が増えないので、そのあたりをどうしたらいいのかというところです。同意書の完全廃止は難しい問題かと思いますが、当日本人の同意があればいいということにするのかどうかも含めて議論いただいて、どういう形ですめるのか、スムーズにいくようにしていただきたいと思いますので、よろしくお願いします。
河野委員 (会長)	ありがとうございました。 続きましてライオンズクラブの佐々木委員、お願いします
佐々木委員	ライオンズクラブ1リジョンと言うと、皆さんあまりご存じないかと思いますが、い

	わゆる中予地区全域にあたりまして、1 リジョンの中に 17 クラブがございます。 その中、17 クラブ全て、献血推進に取り組んではいますが、各地域・クラブによって人数など格差があるため、実際の献血者確保数では、一番多いところで 1200 人ぐらい動員してるところから、数百人程度で推移しているところがある状況となっています。主に活動しているのが大街道献血ルームでの献血支援になりますが、その他、会員企業のところへのバスの誘致もございまして、先ほど話のあった献血バスでの予約関係については、おそらく会員企業のところでしたら、ある程度の人数把握はできてると思いますので、ある程度は予約をしてもらって献血するように、各クラブへ通知したいと思っております。献血については、継続したいと思ってもライオンズクラブの会員の半数ほどがすでに献血ができない年齢に入っておりますので、実質、会員の企業内で動員する或いは、同業種で動員する形となっております。そうすると、どうしても若年層の問題は周知徹底ができておりません。この数年、クラブによっては、愛媛大学、松山大学のご協力をいただいて、大学へ献血バスを配車し、支援をするという形をとっております。我々団体としましては、若年層への周知は、難しいところがあり、どこまでできるかなと思っておりますが、今後も学校へのバスの誘致に力入れていきたいと話しているクラブもございまして、引き続き、できることを推進していきたいと思っております。
河野委員 (会長)	佐々木委員さん、ありがとうございます。 ライオンズクラブの方々の協力は、非常に大きな力ですので、引き続きよろしくお願いいたします。 次に唐木委員から、追加があれば。
唐木委員	さきほどは、時間をいただき事業計画案及び事業報告をご清聴いただきまして本当にありがとうございました。私たちは後継者不足に本当に問題であり、今後私のように、献血に関して、積極的に取り組んでくれる学生が現れるかどうか、不安であります。しかし、今は、がむしゃらに進むしかなく、皆様の温かいご協力がどうしても必要と感じておりますので、今後ともよろしくお願いいたします。
河野委員 (会長)	ありがとうございます。 続きまして三好委員お願いします。
三好委員	若い委員の方の本当に力強い発表もありまして、うれしく思っております。 今は核家族化で家庭的にも、高齢者と若い方との同居が少ないので、若い方との話し合いが難しいですが、私たちの年代から、色々と子供たちにも献血などの大切な話を聞かせること、私は孫と一緒に住んでおり、役所に勤めている孫が「今日は献血をするからよく食べとかなきゃ」等と言って笑ったりしますがそういったことが大切だと思います。以前は献血が難しい時代で、私も母が病気で、血液をいただかなければならない時には、親戚中が血液カードをいただいて、輸血をしたというような記憶がございます。それから、本当に皆さんに助けていただいたんだということは、若い時からずっと思っており、やはり献血運動に力を注いで参りたいと思っております。皆さまにも、そういう心を持っていただいて、ずっと頑張っていきたいなと思っております。
河野委員 (会長)	ありがとうございます。 続きまして庄野委員、何かありましたらお願いします。
庄野委員	私の方から 2 点お話をさせていただきたいです。 聖カタリナ大学では北条キャンパスで大学祭時に献血バスに来ていただきました。当初、予約して必ず 30 名は献血してくださいとのことでしたが、地域の方々が参加してくださったこともあり、47 名にまで増えました。 そこで初めて 400mL 献血をした女子学生が献血後に、言っていたのは、体重がわかるから恥ずかしいっていうのを言っていました。献血バスに乗れることで体重がわか

	るのが、少し恥ずかしいということだと思います。「痛い」等という理由とは別に、先ほどもお伝えしたように大学生らしい理由もあると思います。 計画の中で、成分献血の量を増やしていくという話もありましたが、難しいことかと思いますが、献血バスで、成分献血ができるようになるといいなと感じています。 また、献血を敬遠する理由で一番多かったのが「時間がかかる」ということでした。予約制になることによって、時間も短くなるとは思いますが、その辺りが学生は引かかるところのようです。 2点目ですが、28ページに、幼少期の子供とその親を対象とした普及啓発の記載がありますが、それに関しては、市駅キャンパスの大学祭では、対象を幼少期にはしておりませんが、SRCサークルのメンバーが、血液センターの方からパネルをお借りして、パネルの展示、模擬血液の展示、血圧測定、クイズ形式での献血の紹介を毎年、実施しております。そこで、子供たちも結構来るため、その年代をターゲットにした取り組みはできるかと考えておりますので、また、ご相談させていただきたいと思います。
河野委員 (会長)	庄野委員、ありがとうございました。ぜひ協力して、事業も展開していきたいと思っておりますのでよろしくお願いします。 それでは続きまして、白鳥委員、よろしいでしょうか。
白鳥委員	先ほど羽藤委員がおっしゃられていた保護者の同意書の件は、ごもっともだと思いますので、改善できるところはしっかりと改善していきたいと思えます。同意書については、教育活動の範疇であれば、当課で全国の状況把握や改善のアイディアを出せますが、ですけどちょっとこの献血の同意書については全く把握しておりませんでしたので、事務局のお力添えをいただいて、解決方法等教えていただければありがたいと思います。当日、せっかく献血車も非常に忙しい中、回っていただいているので、効率的に採血を進めていく必要も、あると思いますので。一方で、高校3年では成年の生徒もいますが、未成年者の生徒をどうするか、しっかりと調整していきたいと思えます。 また、今日のお話の中で唐木委員から助けを求める人がいるとのことでしたが、やはり、献血へ向かわせる動機はそこが一番大きいと思えます。 去年も同じこと話したと思えますが、高校生や大学生の若年層に、まずは「命を救うものなんですよ」と最初の段階から意義をしっかりと教える、知っていただくことが一番大きいのではないかと感じます。 コロナ禍を経て若い人の献血率は下がってきてますが、少なくともコロナ禍前の状態までには戻せるのではないかと考えており、意義をしっかりと伝えるというところが少し弱くなっているのではないかなと思います。意義を十分知る、例えば、県庁に献血に来ていただいた時に、「あと10人です」とプラカードを持って回っていただいておりますが、そのプラカードを見ると、「血液が足りていないぞ」、「困ってる人がいるぞ」と献血に行きますが、それはみんなが献血の意義を十分に理解しているからこそ、当日の動機に繋がると思えます。 このことは、先ほども述べた献血率の目標を立てるときも、その意義の教育とセットにして、「困っている人のために、献血というものが重要なんですよ」と学校現場を通じて高校生の皆さんに強く訴えかければ献血率も上がってくるのではないかと思います。そのあたり、私どもも取り組んでいきたいと思えます。
河野委員 (会長)	白鳥委員ありがとうございました。 では続きまして、空岡委員お願いします。
空岡委員	私共、冒頭に紹介がありました献血に関する厚生労働大臣表彰を昨年、頂戴いたしました。本当にありがとうございます。皆様のおかげで、平成6年に大臣感謝状をいただき、それに続くものであるということで、丁度、こういう席に委員として参画させ

	ていただいております、非常に励みになりました。また、「広報いよし」でも微力ですが、市民の方々に受賞をお伝えして、特に献血の輪を広げていこうと取り組みを進めております。 改めまして、県の皆様、そしてまた日本赤十字社の皆様に深く感謝を申し上げます。昨年この委員会で申し上げましたが、我々行政、市や町でどんなことができるかということで、その取り組みの一環といたしまして、市内の事業所への、新規の乗り入れと献血者の受け入れということに取り組んでおり、令和5年に、市内のマルトモという企業、そして今年度に入り、10月に山陽ホールディングスという企業にそれぞれ献血車の受け入れを実施いただきました。 血液センターの山田係長さんと一緒に取り組みましたが、先ほどから話にも出ておりますように、コロナ離れから呼び戻すというのは、現実はかなり厳しいという実感でございました。 その後、企業さんから受入れて本当によかったという声を受けて、そこからご紹介いただき、昨年末に食品メーカーのオカベさんところも、経営者の方にご快諾いただき、現在、日程を調整しております。 最初、実際私も現場へ出向き、経営者の方をお願いに上がるのが一番早いなということで、直接伺いました。その後、担当者を紹介いただきますが、担当者の方は大体30代、企業によっては20代の方がいらっしゃいまして、まさに献血のターゲットなので、「献血とは」というところから始まります。受入れは了承いただけたが、先ほどの学生のアンケートや、高校・大学への取り組みでも発言があったとおり「体重の基準」や「いきなり400mLですか？」と驚かれることもありましたので、今後も献血者を確保していくには、献血量の確保も大事かと思いますが、基準の見直しといったところも、ひとつ考えてもらえたらと思いました。 特に企業によっては女性の方が非常に多いところもあるので、何とか力になりたいと思っていただいているところに、要件ハードルがある状態になっていると感じました。献血車に地域に来てもらうことは、停車している間も住民への大きな周知になると思いますし、企業にとっては社会貢献していますというPRにもなることから、行政としても一体となって、取り組みを進めていきたいと考えております。 今後も、事業者との協力を通じて、献血の輪というものを行政として責任を持って広げていきたいと考えておりますので、ご指導よろしく願いいたします。
河野委員 (会長)	ありがとうございました。市役所の行政の担当者が地元の事業所に直接伺い、配車のお願いをさせていただいてるということで、非常に有難く、すばらしい活動だと思いました。ぜひ、血液センターも一緒になって、どのようにお願いしていくかなどの対応を含め、取り組んでいただければ非常に良いと思いながら聞きました。 実はコロナ禍では、事業所では献血車の受入れを断られ、献血者の確保をどうするかというところで、各市町の役場に相当お願いした経緯があり、そこで結構助けていただきました。そのような経験もあるため、地元の企業再度受入れてもらいたいという思いでやっていただいたのかなと思っております。非常にありがたいと思って聞かせていただきました。 ありがとうございました。 それでは続きまして、和田委員お願いします。
和田委員	本日は色々とお教えいただき、ありがとうございました。 私はバレンタインデーの時にテレビを見まして、目標より200人ショートしてるということで、主人は5年ぶりになります、誘って献血ルームに行って参りました。その時に、カードがなくなり、アプリになることを、職員の方から教えていただきました。アプリになることで予約などが、益々可能になるというのを知りました。そして、私が一番思ったのは、若い方を増やしたいのであれば、ポイント制にするなど、

	いろいろとやり方を変える、例えば、本当に血液が必要なときに若い方のポイントを2倍にする等し、ポイントに応じて、学生の方が必要な図書券や先ほどから言われている体調を整えるグッズなどを選ぶような制度にすれば、若い方も取り組みやすいのではないかと思います。やはり私たちも最初から最後まで1時間ぐらい必要だったので、献血は時間がかかると思いました。困っている方に何かをしてあげたいという気持ちもとても大切ですが、やはり時間をいただいた分の対価として、自分が欲しいなと思うものやメリットを感じられるものがいただけたら嬉しいかなと思いました。 また、余談かもしれませんが、最初のお声がけのときに、職員の方が「献血されますか」とお尋ねいただきましたが、職員の方も献血をされる側に立っていただいて、「献血にご協力いただけますか」といったお声がけに変えていただいたら、とても感じも良くて、気持ちも違うのではないかなと思いました。
河野委員 (会長)	和田委員、貴重なご意見ありがとうございました。 実際、献血をする側、県民の立場での意見は非常に参考になります。 それでは続きまして、玉井委員、よろしくお願いいたします。
玉井委員	初めての参加でいろいろ勉強させていただきました、ありがとうございました。 感想にはなりますが、先ほど唐木委員から丁寧な取り組みをご紹介いただきまして、初めて知ったことも多かったですが、ご自身が使命感を持って活動されてるなというのをすごく強く感じて感動いたしましたし、こちらにも応えなければいけないなと同時に感じました。また、運営にあたり、いろいろご苦労もあるんだろうなというのをもすごく感じました。私は今、愛媛新聞におり、地方紙とよばれる地方の新聞社になります。なので全国47都道府県すべてに同じような地方紙と言われる新聞社があります。各地方新聞社は、同じような理念をその地域で持っていて、同じような課題感を持っています。それと同様に、おそらく、他の都道府県でも同じような学生を主体とした組織があると思うので、そういう人たちと、交流して、ノウハウをもらい、普段の自分たちの活動に生かしていただければ。イベント以外の活動でも生かせる部分があると思いますし、効率化を図ることもできるのではないかと思います。 事務局の方には、橋渡しをぜひ、していただきたいなと思います。 今日はありがとうございました。
河野委員 (会長)	ありがとうございました。 続きまして山崎委員、よろしくお願いいたします
山崎委員	今日はいろいろとありがとうございました。 放送局でございますので、色々な献血の活動などについてお知らせを出す等することで、微力ではありますが、これからもご協力していきたいと思っております。 今日の感想で言いますと、唐木委員の発表は、本当にご努力されていることが分かり、大人世代の1人として感謝を申し上げたいと思いました。 一方で事務局説明をお聞きして思ったことは、原料血漿確保目標量が昨年度より増えていることをお聞きして、医療が進歩し、色々な薬ができ、加えて中高齢者の人数が増えているという状況でおそらく薬の需要も増えてるから割当も増えているのだらうと思いました。その一方で、確実に少子化はこれから更に進んでいくため、若い人の献血を増やすにも限界があると思うため、薬に頼らない中高齢者・健康な中高齢者を増やしていく必要があると感じました。 これは献血の審議ではなくなりますが、それを本当に真面目に取り組まなければ、おそらく破綻するなと感じました。 おそらく10年後には、今の活動を続けていくままでは絶対うまくいかなくなるでしょうから、私も1市民として健康を守っていくことを心がけなければならないと思いました。

河野委員 (会長)	ありがとうございました。 それでは最後に西尾委員、よろしくお願いします。
西尾委員	昨年度この会で、学生献血推進協議会の皆さんのサポートが、高校生が献血の理解を深めたり、行動に結びつけられたりするのではないかというお話をさせていただき、今年度、唐木委員に私の勤務する松山北高校に来ていただいて、放課後の限られた時間ではありましたが、保健委員と献血の話を聞きたい希望者約 80 人の生徒が集まり講座を開催しました。唐木さんの熱い思いとわかりやすい資料を提供いただき、生徒たちは本当に熱心に聞いておりました。私もその講座に参加しておりましたが、この講座を聞いた生徒数名が、その日のうちに、大街道献血ルームに行き、初めての献血をしたということを養護教諭から聞いております。また、その献血をした生徒の感想や校内献血も行いましたので献血をした生徒のアンケートの結果を保健だよりに掲載し、献血に関する特集号などを発行し、今年度、大変力を入れて活動をしております。本校の取り組みから私が感じたことですが、行ける学校は限られると思いますが、大学生の方が高校に出向いて、お話をさせていただくことは、とても有効な手だてであると感じました。 そして、今年度事業と来年度の計画に高校生の献血推進として、推進会議や新規に設けられる普及啓発イベント等の記載がありましたが、参加する生徒は保健委員だけではなく、進路選択をするうえで、医療系への進学や医療に興味関心がある生徒も参加しております。 今年度、本校も推進会議に参加しましたが、事務局の説明では、推進会議に 7 校の参加があったとのことでした。これは県内の高校に呼びかけられての 7 校だと思うのですが、対策とも関連してくるところですが、会場が松山の場合、松山近隣以外の学校は集まりにくいのではないかと感じます。また、来年度の啓発イベントも、計画されているようですので、県内の学校を巻き込んだ取り組みをするなら、やはり東予と南予の学校も参加しやすい会議のあり方をご検討いただけたらありがたいと思います。
河野委員 (会長)	西尾委員、貴重なご意見ありがとうございました。 一通り皆さんご発言いただきましたが、各委員のご意見を聞かれて追加発言や補足説明はございませんでしょうか。 それでは議題の方に戻りたいと思いますが、令和 7 年度の愛媛県献血推進計画案について、皆さんご了承いただけますでしょうか。 (承認) ありがとうございました。 それでは、ご了承いただいたということで、この計画に基づいて来年度、献血活動を推進して参りたいと思います。 また今ほど、皆さんからいただいた貴重なご意見は、来年度の各種の事業に生かしていきたいと思いますので、委員の皆様にもご協力の方をお願いいたします。 それでは長時間にわたりまして本当に熱心なご議論ありがとうございました。 これもちまして、本日議事を終了させていただきます。